

## 【基調講演】

### 「まちづくり」と「活力」について

藤井 聡氏（京都大学大学院工学研究科都市社会工学専攻教授）

「第5回関西元気な地域づくり発表会」基調講演録

日時：平成22年3月12日（金） 13:00～14:00

於：ドーンセンター4階会議室

#### 「まち」は「生き物」 ～社会有機体説（オーガニズム）の思想～

私は土木計画を考える政策論を専門に研究しています。例えば高速道路の無料化をどうすればよいのかや、羽田空港をどうするか、港湾をアジアの中でどのように強く作っていくか、そしてまちづくりをどういう風に進めていくかといった、いわゆる社会基盤の土木計画を手がけています。

そういう立場から、「まちづくり」に色々関わらせていただくことも多いのですが、本日は「まちづくり」と「活力」についてお話をしたいと思います。その中でまずは「まちづくり」とはどういう言葉か、ということから考えたいと思います。「まちづくり」とは「地域づくり」や「国づくり」よりも多用されているメジャーな言葉であり、非常に汎用性が高く色々なところで使われています。要するに「まち」というものがあって、地域の中に、あるいは山であれば村、大きな国土であれば国、大阪であれば町、というある種の地域の広がりがある、そこをどう作っていくかというのが「まちづくり」なんです。この「まちづくり」と「活力」がどんな関係にあるのかというのが、今回のテーマでもあります。

「まちづくり」が何かというのを分かるためには、「まち」というのが何なのかを理解する必要があります。「まち」という言葉には色々な表現の仕方があります。「町」や「街」、平仮名の「まち」、英語の「シティ」、非常に大きな都会を意味する「アーバン」、小さいまちや村のような感覚の「タウン」。このように色々あるわけですが、それぞれの表現についてどれが温かいか冷たいかを考えてみて下さい。「まち」が一番温かみがあり、「タウン」も温かい印象です。「アーバン」とか「都会」は、鉄の塊がイメージされるので冷たい感じがしますが、人間が住んでいるせいか、どこか温かみがありますよね。つまり、「まち」には様々な表現方法があり、程度の差こそあれ、私たちは「まち」というものを無機物ではなく、有機物と思っているんです。

鉄や石は無機物であるのに対し、私たち人間や食物、木、緑、多様な生物が住む海などは全部有機物です。一言で言うと、生き物か生き物でないかということなんです。そう考えると、私たちは「まち」という時に何となく生き物的な雰囲気です。「まち」という言葉を

使ったり、「まち」という対象と接したりしているんですね。

これは私たち一般の人間がそう思っているだけではなく、学術的にも古くから「社会有機体説（オーガニズム）」とあって、「社会というものは生き物なんですよ」という学説があるんです。

2500年前のギリシャの哲学者、プラトンの著書「国家」には、次のようなことが記されています。「人間が正しく生きるにはどうすればいいのかを考えたい。その時に、人間に似たもので一番大きいものを哲学的に議論することで、人間というものが見えてくるのではないか——。その人間に似た一番大きなもの、それは『国家』ではないか」と。

当時彼らはギリシャの都市国家に住んでいたので、彼らの知っているところの一番大きなもの、それが国家だったんですね。プラトンの学説では「人間と国家とは一緒」だということが前提になっており、これは「社会有機体説」と言われています。この学説が社会有機体説の源流になっていると言われているんです。

### 「活気がある健全なまち」と「生命力が弱っている不健全なまち」

最近になって、と言いましても200年ほど前の話ですが、「社会学」という学問が生まれました。それを作ったのがイギリス人哲学者、ハーバード・スペンサーです。彼はもともと生物学者で、生物のことを研究してきて社会を見たら、社会そのものも1個の生物だったということに気づきました。そして生物の定義を考えた時、生命体があってその周りの環境を少し変えると何らかの反応をすることが生命の定義だとすると、社会にもそのまま当てはまったんですね。社会というものは生命そのものだ、というわけです。

例えば、「私たちは『まち』を温かく感じ、心の中で『まち』のことを有機物（生き物）だと思っている」と先ほど述べましたが、地方都市や郊外でよく見られる「シャッター街」（ほとんどの店舗が廃業し、シャッターが下りている商店街）に行くと、何か無機物な感じがして仕方がないものです。逆に、老若男女がたくさん歩いていて、新しい店も次々とオープンしていて、色々なモノが売られているにぎやかな繁華街に行くと、「すごい活気があって、生き生きしているな」となるわけです。

つまり、私たちは如実に「まち」に関して、生命力がみなぎっているまちと、生命力の非常に弱い、ほとんど死にかけてようなまちというものを、知らず知らずのうちにかき分けているんですね。こうしたことから、「まち」というものは命ある生き物であり、この観念がまちづくりをやる上で一番最初に肝に据えておかなければならないことではないかと、私は確信しています。

### 近代化への道と国家の繁栄

私たち日本人は近代以降、まちそのものを生き物として扱ってきました。例えば海には

海の神様が、山には山の神様が、川には川の神様がいるという日本文化において、この世の森羅万象は生き物であり、その中にあるまちというのは当然ながら生き物の一部をなしているという風を感じていたわけです。

ところが黒船に乗ったペリーが来航した1853年以降、日本は一気に近代化への道を進みました。「このままだと侵略されて、他のアジア諸国のように植民地にされるのでは・・・」との恐れと不安から、必死になって鉄道やダムを作ったんです。

一例を挙げますと、私たち土木計画をやっている研究者にとって先人である井上勝という人が、伊藤博文と一緒に英国で勉強して帰国し、土木を1人で研究して東海道本線を通したんです。東京と大阪を、まずは電車をつないでおかないといけないということで。これを4、5年という短い期間で作ったんです。なぜそんなに急いだかと言いますと、先述の通り、侵略による植民地化への恐れからです。

しかし、井上勝は土木技術者として一気に東海道本線を通したことが嫌で嫌で仕方なかったそうです。美田良圃という言葉をご存知でしょうか？「美しい田んぼと非常によき畑」のことですが、当時の日本には非常に美しい美田良圃があったんです。井上勝も子どものころそういう田畑で遊んで育ったのですが、英国から帰国した時に、西洋列強との戦いの中で日本は早急に近代化しなければならないというミッションのもと、ダーッと線を引き、非常に多くの田んぼをつぶしたんです。仕方がないことだったんですが・・・。今ではそういうことはものすごく大変ですが、当時はダーッと線を引き、ガーッとモノを作れる時代だったんですね。

ただ、井上勝はとても心を痛めたんです。それで、美田良圃をつぶしたせめてもの罪滅ぼしにと、東北地方の荒れ地に広大な農場、小岩井農場を作ったんです。今もその農場は繁栄していて、そこで製造された乳製品は全国で販売されています。

というように、明治時代はそういう話がいっぱいあるのですが、大正、昭和と来るとだんだんそういう罪の意識がなくなってくるんです。田畑をダーッとつぶして、ブルドーザーで土砂を運んで・・・というイメージがありますように、日本から美田良圃の風景がどんどん消えて行きました。

確かに、時代とともに情勢はますます厳しくなりましたから、致し方ない面があったのも事実です。第2次大戦後も焼け野原のまま放置していたら、そして何の経済復興もしなかったら、今の日本はありえません。

大阪も万博で元気になりました。万博の時に新幹線や高速道路など、ものすごいナショナルな土木、インフラストラクチャーがいっぱいできたんです。ちょうど現在の中国が急成長しているような感じです。あの時の高度経済成長がなかったら、今の世界経済のグローバルゼーションの中での日本の地位はなかったはずですよ。

切実なもので、国家というものはつぶれるんです。数百年前、世界を支配していたスペインやポルトガル、オランダといった国々が、現在もなお当時の勢力を世界の中で維持しているかという、そうとは言えません。そう考えると日本も滅びる可能性があるんです。

それはどの国・地域についても同様のことが言えます。ところが、人間というものは、子どものころ自分が生まれ育ったまちがすごく活気があったのを見ていたら、まさか自分の生まれ故郷がつぶれるはずはない、とってしまうものなんです。まさに、「まち」は命ある生き物だから、目の前で来ているこの故郷が死ぬはずなんて、と思うわけです。

### 「まちづくり町衆」の理想像とは・・・

この「まち」を「つくる」という、「まちづくり」についてここで考えてみたいと思います。「まちづくり」は「人づくり」と同様に、強い意志と愛情、明確なビジョン、そしてリスペクト（尊敬）が必要不可欠です。ですから、「まちづくり」をする人には「まち」に対する愛情とある種の思い、理想やビジョンが求められますし、同時に愛憎の「憎」もないとだめなんです。

なぜ「憎」が必要かと言いますと、まちづくりをする人には、今のまちの状況が嫌で、こんなはずではないという「愛するがゆえの憎」があるはずなんです。「憎」があるがゆえにまちづくりに没頭していくようなこともあるかもしれません。愛憎半ばするような関係性を「人」と「まち」という大きな生き物との間で取り結ぶ、これが「まちづくり」という言葉の本質だと私は思います。

さて、活力あるまちにしたいというのが「まちづくり」ですよね。例えば、愛憎を半ばしつつ「まちづくり」に命を捧げる人間を「まちづくり町衆」と呼ぶことにします。この「まちづくり町衆」の本質は、自分の私利私欲ではなく、みんなのために行動するというパブリックスピリッツです。ボランティア精神と通じるところもあります。生命哲学の代表的哲学者、ホセ・オルテガ・イ・ガセットは自身の著書「大衆の反逆」の中でこう説いています。「人間、貴族たるべし」と。好むと好まざるに関わらず、何かのご縁である責任を負うことになったとするならば、それを運命愛と受け止めて、自分の運命を愛することができる人間が「貴族」というわけです。それが何か「まちづくり」という言葉の本質にあるのではないかなあとと思います。

### 「まちづくり町衆」の活力は、やればやるほど楽しく活気づく

まちづくりにまさに命を捧げるような活動をされている方々のお話を伺うという研究をやっております。その中で感じましたのは、まちづくりをやっている人間はみんな、やればやるほど「まちづくり町衆」の活力が大事だと感じている、という点です。彼らに共通しているのはバイタリティーの塊であること、明るくて活力がみなぎっていることです。その活力はどこから出てくるかと言いますと——、実はこれにはスパイラルがあるんです。ちょっと面倒だなと思えることを我慢してある種の責任を果たすと、何か自分の活力がぽっと大きくなる。ぽっと大きくなったら誰かとまた会って情報交換し、そこでまた活

力をもらう。さらに活力が出てきたらまた新たな仕事がある——。そういった「まちづくり町衆」のポジティブスパイラルは、生命の活性化スパイラルとも言えるでしょう。

ここで大切なのは、「まちづくり町衆」は体が健康で元気であることです。そこで身を崩してしまえば意味がないんです。そういう意味においてのみだけ利己主義というのは道徳的に足りません。ご自愛を——というのはそういうことです。

体を大切にするというのは利他的な意味も含まれており、人助けをするのに自分が健康を害しては助けることができません。「まちづくり」に関わっている方々には、適度な利己主義と可能な範囲の利他主義を携えながら、明るく楽しくスパイラルを築いていただくと、人生はもっと楽しくなるのではないかと思います。

(配付資料)

## 「まちづくり」と「活力」について

京都大学 藤井 聡

### ・「まち」は「生き物」 ～オーガニズムの思想～

※「オーガニズム」＝コミュニティ・地域・まちを生き物（有機体）と捉える考え方

→ 「まち」は。。人工的につくりあげること（人造）はできない。

その変化の「制御」もできない。

自律的に成長していく。

「いま」の状態は、過去の経緯（＝歴史）に依存。

・「健全なまち」 例) 伝統をたたえ、活力があり、「自律的」に変化し、新しいものを生み続けていくまち。

「不健全なまち」 例1) さびれた中心市街地。伝統が継承されず、古き良きものがなくなり、新しいものが生み出されることもない。 [死]

例2) 「自律性」がなく、全て、外部装置（例、当該のまちとは無縁な大資本の商業）によって動かされているまち。 [植物人間]

### ・「まちづくり」とは何か？

- まちづくりとは、『生物としてのまちの活力の増進』を目指した取り組みである。

(※ 不健康なまちの健康状態の回復) [土木計画学（藤井聡, 2008）より]

- しかも、その活動を行うのもまた、生き物としての、「そのまち」である。

→つまり、まちづくりとは、

「ある一人の人間が、  
自分の健康に気遣いつつ、あれこれと、  
自分自身の暮らしぶりを改善していく取り組みを持続的につづけていく」

という（健康増進の）姿と、基本的に同じなのである。

### ・「まちづくり」を進めるのは「何」なのか？

- 健康増進を続ける一人の人間の場合、それを進めるのは、

短期的な「損得勘定」を越えた、長期的・利他的視野を持つ「理性」である。

→「まち」におけるそうした「理性」とは、「まちづくり町衆」である。

それ故、「まちづくり」において何よりも重要なのは、

我が身の損得を顧みない、「まちづくり町衆」の活力である。

- ただし、一人の人間の場合、「理性」だけがあっても、健康増進を続けることはできない。

そして、「健全な肉体」があってはじめて（衣食足りて礼節を知るのように）、「理性」に力が宿る。

→すなわち、「まちづくり町衆」の活力は、「まちづくり」に直接関わらずとも、真面目にく

らす、「健全なる庶民」がそこにおいて、はじめて宿るものである

(→むしろ、その中から、「まちづくり町衆」がある日突然、現れるのである！)。

以上